パーリ三蔵にみる菩提樹供養

——出家者の役割と菩提樹観——

清水 洋 平

1. はじめに

パーリ三蔵のなかで、菩提樹に対する供養の記述は、*Khuddaka Nikāya* 所収の *Jātaka* (*Jā*) に2例と *Apadāna* (*Ap*) に24例の計26例の用例が見出せる。本稿は、これらの中から、実際に在家者が行っている仏教儀礼を出家者が自己の帰依する仏教の問題として如何に受けとめてきたかを考察し、菩提樹供養における出家者の役割り並びにその菩提樹観を明らかにする。

2. 菩提樹供養と出家者

パーリ三蔵の記述を見る限りでは、菩提樹供養における供養者は、そのほとんどが在家者である。菩提樹供養とは在家者にとり身近で重要な宗教行為であったと思われる。では、出家者はどのような関わり方をしていたのであろうか。出家者が菩提樹供養に関わる用例は、僅かであるが *Jā*. 479 (*Kālīṅgabodhi-jātaka*), 261 (*Paduma-jātaka*), *Ap*. 89 の3例がみられる。これらの用例を検討すると、以下のよう二つの関わり方が認められる。

① *Jā*. 479 にみるように出家者アーナンダは、菩提樹供養を行うにあたり、在家者の要請に応じて、周囲に菩提樹供養の実行を呼びかけるが、自分自身は何かを供えたり、施したりはしない。このように、在家者の要請に応じての菩提樹供養を呼びかけるが自分自身は直接に関わらないあり方。

② *Jā*. 261 や *Ap*. 89 にみられる、田舎出身の出家者や一部の出家者が菩提樹供養に花環や水をもって直接に供養に関わるあり方。

ただ、そのような中で、

1) *Theragāthā-aṭṭhakathā* (*ThA*) . 217 に【彼(在家者)に長老は菩提樹供養を勧めた。】(*ThA*. pp.81-82) として、出家者が在家者に般涅槃した仏の代わりに菩提樹供養を勧めている記述がある。このように註釈文献においても出家者が在家者に菩提樹供養を呼びかけるような記述がみられること。

2) 蔵外文献である *Mahābodhivaṃsa* (*Mhbv*)¹⁾ に代表される後の時代に記された

文献でも、関連記事中にみられる菩提樹供養への出家者のあり方は、②のあり方が一切見られず①のあり方のみが見られること。

- 3) *Dhammapada* (*Dhp*). 188, 189 偈に【実に多くの人々は恐怖に駆られて、山々や森、園林、樹木、チェーティヤ（供養の対象・霊樹）などに行き、心の依り所とする。】(*Dhp*. 188, p. 53), 【しかしこれは、安らかな心の依り所ではない。これは最上の心の依り所ではない。これらを心の依り所にしても、一切の苦から解放されることはない。】(*Dhp*. 189, p. 53) と端的に表明されているように、出家者にとっては、あくまで目指すものは解脱・涅槃であり、それ以外のことは、第一義的なことではなかったはずである²⁾。

これら三点から、①のようなあり方が出家者の本来的な関わり方だと思われる。従って、菩提樹に対する出家者の役割とは、供養の立会い者であり、在家者の要請に応じて菩提樹供養を呼びかけ、生天思想を背景に在家者に徳行を積ませることに重点があった。また、出家者は①のようなあり方が本来的であったであろうが、②のように、菩提樹供養に直接に関わる一部の出家者がいたのも事実であったと思われる。これらのことは、当時の出家者のあり方をよく表していると思われるし、また菩提樹供養に対しての出家者と在家者のあり方が垣間見れる。

3. 菩提樹観の変化

經典編纂者たちは、一体菩提樹をどのように捉え *Jā* や *Ap* に供養の記述を残したのであろうか。菩提樹供養の記述を詳しくみると、大きく三つに分けられる。それは 1) 菩提樹を、仏を追憶する場所として捉えるもの、2) 菩提樹を、仏そのものと捉えるもの、3) 菩提樹を、仏の悟りそのものと捉えるものである。

1) 菩提樹を、仏を追憶する場所として捉えるものについては、*Ap*. 216 の用例がある。この用例は、*Theragāthā* (*Th*). 217 にも同一の偈が存在する。従ってここにみられる菩提樹の捉え方は、他の *Ap* に記された菩提樹の捉え方の中では時代的に古いとみられる。そこには、【よく育っている樹であり、緑の光をもつアッサッタにおいて憶念した〔私は〕一つの仏に向けた想いを得た。】(*Ap*. 216-1, p. 210) とある。この用例に関しては註釈がなされていないが、同一の偈である *Th*. 217 には註釈があることから、それを援用しこの偈を解釈すると、菩提樹であるアッサッタ樹下に座し（仏を）憶念して、一つの仏に向けた想い（仏随念）を得たと註釈を与えているのである。この偈は菩提樹供養の場面を記すものであるに関わらず³⁾、他の *Ap* の記述にみられるような菩提樹そのものに対して何か供養を行うのではなく、樹下で仏を想うこととしている。

2) 菩提樹を、仏そのものと捉えるものについては、① *Ap.* 58, 96, 114, 368, ② *Jā.* 479, ③ *Ap.* 235, 429 等の用例がある。① *Ap.* 58, 96, 114, 368 の4例は、菩提樹に礼拝・奉仕することをもって供養する記述であるが、これらには「正覚者の面前にいる如く菩提樹を礼拝・奉仕する」⁴⁾ という記述がみられ、菩提樹が正覚者(仏)に想定されて礼拝・奉仕されているとみられる。② *Jā.* 479 の用例では、釈尊が留守の時、「世尊の代わりとして何が供養対象となるのか」という質問に対し、釈尊自身の言葉として、【諸仏が用いられた大菩提樹は、存命中も亡くなってからもチューティヤ(供養の対象・霊域)である。】(*Jā.* IV, p. 228) と語られる。これは、菩提樹が世尊(仏)の身代わりとしての供養対象ということである。またその後、ジェータ林の入口に菩提樹を植えることをアーナンダから聞いた釈尊は、【よろしい、アーナンダ、植えなさい。そうすればジェータ林には、いつも、私がいるようになるだろう。】(*Jā.* IV, p. 228) とあり、菩提樹は自分自身がそこに存在することと等しいと考えられている。ここでは明らかに菩提樹は世尊(仏)を代表している。③ *Ap.* 235, 429 の用例は、Vediyadāyaka(欄楯施与者)長老と Ekasaṅkhiya(或る法螺貝)長老が、各々菩提樹に対してその周囲に欄楯を作る供養、菩提樹に対して法螺貝を取って奉仕し毎日鳴らしながら礼拝する供養を述べている。欄楯の供養と法螺貝を取ってする供養の功德(果)をどちらも「buddhapūjā' idaṃ phalaṃ」として「仏供養」としている。これも菩提樹が仏を表すものと想定していて、菩提樹に供養することは、仏に供養することになることを表明していると思われる⁵⁾。

3) 菩提樹を、仏の悟りそのものと捉えるものについては、*Ap.* 89, 304 の各註釈から知ることができる。*Ap.* 89 の註釈では、「ヴィパッシー仏の大菩提樹祭があった」という記述に対する註釈において【またそこで「大菩提樹」という菩提[樹]が四道における智⁶⁾といわれる。】(*Apadāna-aṭṭhakathā* (*ApA*), p. 405) という記述があり⁷⁾、ここでは、菩提樹は四道の智であると解釈している。*Ap.* 304 の註釈では、こちらにも「ヴィパッシー仏の大菩提樹祭があった」という記述に対する註釈において【「大菩提樹祭があった」とは、ヴィパッシー仏には四道の智の保持があるから菩提[樹]という名を得た樹の供養があったという意味である。】(*ApA*, p. 475) という記述があり、菩提樹とは四道の智、すなわち四向四果から得た智とみている。これらの用例から、ここでは菩提樹を仏の悟った智慧を表すものと捉えていると考えられる。

以上、時代別の文献の上で菩提樹に対する捉え方に変化が見受けられる。*Ap.*

216 にみられる菩提樹の捉え方は、*Th.* 217 に同一の偈が存在することから他の *Ap* にみられる菩提樹の捉え方よりも時代的に古いと考えられる。従って *Ap.* 216 乃至 *Th.* 217 の作成された段階では、菩提樹をその樹下で「仏を追憶する場所」として捉えていた。その後、他の *Ap* や *Jā* が作成された段階では、菩提樹を仏そのものとみる意識が現れ、菩提樹を「仏そのもの」と捉えるようになっている。さらに、註釈文献の作成された段階では、四道の智、即ち四向四果から得た智をそこに見出すようになっている。これは明らかに菩提樹の供養に携わった人たちの意識に変化があったことを示している（実際に菩提樹供養を行っていた多くの在家者にそのような意識の変化があったかどうかはわからないが、少なくとも文献を記した出家者側にはこのような意識の変化が働いていたのだと思われる）。菩提樹を「仏そのもの」として捉える段階から「四向四果から得た智」と捉える段階への移行行きは、仏教徒が、初期の段階では覚者としての仏自身を注視していたものが、仏の悟った智慧に人々（出家者側）の関心が移っていった現われではないだろうか。既に遠く隔たった生身としての仏の記憶とは別に仏の得る智（仏を仏たらしめた正覚の智慧）に関心が移行したことが背後にあり、菩提樹を仏そのものとする記述から、註釈文献にみられるように菩提樹を四向四果から得た仏の智を表していると捉える解釈がみられるようになったのだと思われる。

4. おわりに

菩提樹供養はあくまで在家者の供養であるが、在家者の間で盛んに行われていたであろう菩提樹供養に対して、出家者たちは、その現状を自分自身においてどのように納得するか、どう矛盾なく僧伽の中で位置付けていくかという葛藤の中で、単純に拒否するのではなく、実際は在家者によって支えられている僧伽の現実も念頭において、在家の要請に応える形で供養に関わり、供養の立会い者のような役割を担うことになったと考えられる。出家者は、在家者の要請に応える中で、在家者に菩提樹供養の意味合いを教え、自らにも供養を行う説明原理をたてて、そのように思わせるように説きほどきをしてきたと考えられる。出家者である經典編纂者たちは、その意味付けを *Jā* や *Ap* の中に書き記し、菩提樹供養を意義付けてきたと言える⁸⁾。また、供養に対する意味合い（意味付け、理由付けなど）は、時代が移り行くと共に変化した。それは上記した菩提樹を「仏を追憶する場所」から「仏そのもの」、そして「仏の悟りそのもの（法）」を象徴するものと捉える菩提樹観の移行行きによって明らかである。菩提樹供養は、出家者にとってその意義が時代を経るに従って変化したことが文献上に認められた。

1) *Mhbv* は、パーリ文献史上に連綿と続く歴史書 (*Vaṃsakathā*) の範疇に属し、内容は題名に見られる通り、サンガミッター (*Saṅghamittā*) 比丘尼と共にスリランカへ来島したと伝えられる菩提樹の因縁を解き明かすことをテーマとする。多くの類書と同様に、*Dīpavaṃsa* や *Mahāvāṃsa* を初めとする既存の権威ある歴史書に典拠の範をとり、仏伝から始めて固有の主題である菩提樹へと展開する全 12 章からなる物語である。10 世紀後半にウパティッサ (*Upatissa*) が著したものとされる。南清隆『*Mahābodhivaṃsa* 試訳と註解 (I)』『華頂短期大学研究紀要』32, 1987 参照。 2) 「自らを島とし、自らを依り所として、他人を依り所とせず。法を島とし、法を依り所として、他のものを依り所とせずにあれ」(*Dīghanikāya(DN)*. II, pp. 99-100, *Samyuttanikāya(SN)*. III, p. 42), 「法を見るものは我を見る。我を見るものは法を見る」(*SN*. III, p.120.), 「我亡き後は、わが教えである法と律とが師である」(*DN*. II, p.154) など。また、パーリ三蔵において、出家者が菩提樹供養に関わる記述が 26 例中 3 例しか見られないことも、出家者にとって菩提樹供養が第一義的なことではなかったことを物語るものと思われる。 3) この偈に対する註釈の中で【…彼に長老は菩提樹供養を勧めた。彼は時々、菩提〔樹〕の樹の近くに行つて、仏の徳を随念しつつ…】(*ThA*, pp. 81-82) とあるように、この偈は明らかに菩提樹供養の場面が述べられているものである。 4) *Ap.* 58-2, p.108, *Ap.* 96-3, p.136, *Ap.* 114-3, p.149, *Ap.* 368-3, p.290. 5) その他、『阿育王経』(『大正』50, p.139 b) に成道処の菩提樹について阿育王が、「我見此樹王即是如来、樹王若枯死、我命随滅」と言っており、明らかに菩提樹を仏として捉えている。また菩提樹に対する供養者の態度を示す一例としても興味深い。*Divyāvadāna*, p. 398, 『雑阿含経』(『大正』2, p. 168 c) 参照。 6) ここでの ‘*catus maggesu nāṇam*’ (四道における智) とは、具体的にどのような智を指しているかは明らかではないが、他のパーリ聖典にみられる用例から考えると、四向四果より獲得した智を指していると思われる。cf. *Paṭisambhidānamagga* (I, pp.69-70, II, pp.189-190) 参照。 7) この註釈文の後に【そのことをここに坐された世尊 (過去仏) が洞察するという菩提樹 (*bodhi*) はまさにカニカーラ樹といわれる。そしてその天、婆羅門、人、阿修羅によって菩提樹を祭るから大菩提樹である。また偉大なる仏世尊の菩提〔樹〕(*bodhi*) は大菩提〔樹〕(*mahābodhi*) である。それが大菩提樹である。その大供養があったという意味である】と続くことから、ここでは菩提樹のことを指していると思われる。 8) 菩提樹来島を主題にした *Mhbv* が、後世 (10 世紀後半頃) に編纂されたことは、その典型であると思われる。 *本稿で扱った *Jā.* 479, 261 の用例としているものは *Jātakaṭṭhavaṇṇanā* の散文の部分に記されているものであることを注記しておく。

〈キーワード〉 菩提樹供養, 出家者, 在家者

(大谷大学非常勤講師, 博士 (文学))

156. A Study of the Five Aggregates (*khandhā*) on the Basis of the Text-critical Investigations of Early Buddhism

MURAKAMI Shinkan

It is to be reconsidered how to study Early Buddhism. I stress the importance of the text-critical investigations and demonstrations.

It seems peculiar to Buddhism from early on that our human existence is analytically grasped as consisting of five aggregates (*khandhā*), i.e. the sensible (*rūpa*), sensation (*vedanā*), conceptual image (*saññā*), mental and physical latent forces (*saṃkhārā*) and cognition (*viññāṇa*). But there are other orders of aggregates. According to the traditions of the Vedānta, i.e., Śāṅkara and others (ad *Brahma-sūtra* 2.2.18) the order is *rūpa-vijñāna-vedanā-samjñā-saṃskāra*, and according to Jaina-tradition, i.e., Haribhadra-sūri (*Śaḍdarśana-samuccaya* 1.5) it is *vijñānaṃ vedanā samjñā saṃskāro rūpam*. Harivarman's *Chengshi lun* 成実論 (vol.3, T.32, No.1646, 261a^r) which was translated by Kumārajīva in 412 enumerates *rūpa-vijñāna-samjñā-vedanā-saṃskāra*. In the fifth century Buddhaghosa in his *Visuddhimagga* (PTS ed. 452¹⁵) explained the five aggregates in the same order as that of Śāṅkara's enumeration. So Śāṅkara and others must have had some credible Buddhist sources.

I investigate original and developed meanings of each of the five aggregates, and lastly consider the original and developed meaning of *nāma-rūpa* (name and form) which is looked upon as the cause (*samudaya*) of cognition (*viññāṇa*) It means originally name and personal looks, then mind and body, and is explained as being composed of five aggregates or four aggregates except cognition.

157. Bodhi Tree Worship As Seen in the Pali Canonical Texts: The role of the renunciants and their view of the Bodhi tree

SHIMIZU Yōhei

In the Pali canonical texts, there exist 26 examples (2 in the *Jātaka* and 24 in the *Apadāna*) that mention worship of the Bodhi tree. In the worship of the Bodhi tree, the renunciants did not do anything by themselves. Rather, while responding to the requests of lay followers, they suggested the worship of

the Bodhi tree and played the role of advisor or observer. They taught lay followers the meaning of Bodhi tree worship, and explained to them its significance. It developed in a gradual process as below: Very shortly after the *mahāparinibbāna* of the Buddha, the Bodhi tree was seen 'the place of reminiscences of the Buddha'. With the passage of time, when the *Jātaka* and the *Apadāna* were written, the Bodhi tree was perceived as 'the Buddha himself'. As time went on further, when the commentaries were written, the Bodhi tree was accepted as the wisdom of the four-fold path or 'the enlightenment of the Buddha'.

In this paper, I refer to some of the literary evidence and discuss how the concept of worship of the Bodhi tree changed with the passage of time, particularly for renunciants.

158. On the Significance of the *anupubbikathā* in Pāli Texts

AMANO Shin

This paper provides an analysis of the *anupubbikathā*, the Buddha's method of addressing his teaching to the lay community in Pāli texts. In the first section, an analysis will be presented of the *anupubbikathā* which occurs in the biography of the Buddha as contained in the Pāli *Vinaya* (*Vinaya*. I pp.1-44). A parallel description occurs in the *Dharmaguptaka-Vinaya* (四分律) and *Mahīśāsaka-Vinaya* (五分律), although the presentation is different. Through a closer examination of this difference, it will be shown that the *anupubbikathā* is closely related to the Four Noble Truths as described in the Buddha's first sermon. In the second section, it will be seen that the *anupubbikathā* is used as the Former Buddha's first sermon in the *Mahāpadānasuttanta* (*DN.14, DN. II* pp.1-54). This will allow us to speculate that the value of this sermon gradually increased over the course of the formation of the Pāli Canon. Thus, by showing that the *anupubbikathā* presupposes the description of the Buddha's first sermon, it will be argued that the *anupubbikathā* takes on the function of presenting the Four Noble Truths, as described in the Buddha's first sermon, in a more intelligible fashion.